成績概要書(2008年1月作成)

研究課題：赤肉メロン新品種候補「空知交16号」(「メロン赤肉品種の早期開発試験（Ⅱ)」、「クリーン、省力栽培に適した赤肉メロン品種の育成」)
担当部署：花・野菜技術センター　研究部　野菜科、株式会社大学農園
予算区分：共同研究
研究期間：1997～2007年度(平成9～19年度)

1. 特性一覧表

系統名	空知交16号(F_1)	交配組合せ	「DHM-R2」(種子親)×「Dkg」(花粉親)
特性	長所 1.ネットの盛上りが良い。 2.草姿が「ルピアレッド」と同様にコンパクトである。 3.赤肉臭が少ない。		短所 1.果形が管理によりやや扁平になる場合がある。 2.収穫期に土壌水分が過剰だと裂果する場合がある。
適応作型	無加温半促成		
普及見込み面積	20ha		
調査場所・作型	花・野菜技術センター(育成場) 無加温半促成		地域適応性検定現地(6箇所) 無加温半促成
調査年次	平成17～19年		平成17～19年

品種・系統名 / 項目	空知交16号	ルピアレッド(標準品種)	いちひめ(比較品種)	レッド113(比較品種)	空知交16号	ルピアレッド(標準品種)
早晩性	中生	中生	中生	極晩生	中生	中生
開花始(月/日)	5/29	5/30	5/29	6/1	6/3	6/3
着果率(%)	96.6	99.6	98.3	99.4	95.5	95.6
成熟日数(日)	51	50	51	58	51	48
着果期つる長(cm)	168	173	214	183	180	175
着果期葉身長(cm)	16	16	18	18	20	19
着果期葉柄長(cm)	19	20	21	25	―	―
着果期葉数(枚)	25	27	26	24	28	29
着果期草勢	中	中	強	強	中	中
収穫期草勢	中	中	ヤ弱	ヤ弱	―	―
果径比(縦径/横径)	0.99	1.07	1.06	1.05	0.98	1.04
果皮色(追熟後)	濃緑-緑	緑-灰緑	緑-灰緑	濃緑-淡緑	緑-淡緑	淡緑-クリーム
ネット盛上[1]	4.2	1.9	2.0	3.7	4.6	3.0
日持ち性[1]	3.7	3.0	4.3	4.7	3.6	3.0
Brix(%)	14.1	14.1	14.6	14.5	14.6	14.4
果肉厚(赤道部、mm)	39	40	45	43	35	33
果肉色	赤橙-橙	赤橙-橙	橙-淡橙	濃赤橙-橙	赤橙-淡橙	赤橙-橙
発酵程度[2]	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	0.0
赤肉臭強さ[3]	1.5	3.1	1.4	3.0	2.4	3.0
食味[1]	3.5	3.4	3.3	3.2	3.2	3.0
平均一果重(g)	1899	1818	1938	1840	1942	1800
裂果率(%)	4.2	2.8	2.8	0	7.3	2.8
良果収量(kg/a)	310	319	314	297	363	390
良果収量(標準品種対比)	97	100	98	93	93	100
うどんこ病耐病性	強	強	強	弱	強	強
つる割病(レース0)抵抗性	強	強	強	―	―	―
つる割病(レース2)抵抗性	強	強	強	―	―	―

[1]1(不良)-5(良)、[2]0(無)-4(甚)、[3]1(弱)-5(強)

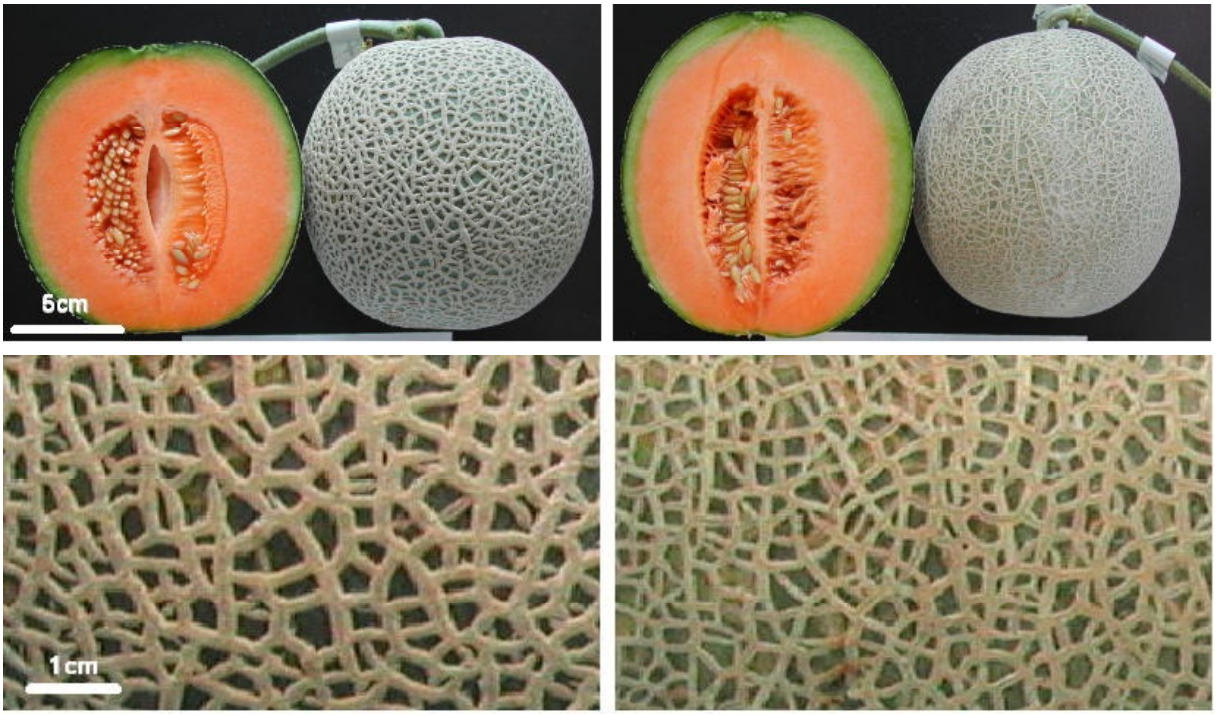
2.「空知交16号」の特記すべき特徴
　ネットは盛上りが良く、果実外観品質に優れる。草姿はコンパクトであり、また、うどんこ病に耐病性を有するため栽培管理が行いやすい。食味は赤肉臭が少なく、くせのない味である。

3. 北海道で優良品種に採用しようとする理由
　「空知交16号」はネットの盛上りが現在の主力赤肉品種である「ルピアレッド」及び優良品種である「いちひめ」より明らかに優れ、高級メロンとされるアールス系メロンに準じる外観品質を有するため高価格が期待できる。また、アールス系メロンの欠点である発酵果の発生、果実肥大の悪さは認められない。草姿は「ルピアレッド」と同様にコンパクトであるため効率的に整枝作業が行え、また、うどんこ病にも耐病性を有することから栽培管理が行いやすい。糖度は「ルピアレッド」と同等であるが、赤肉臭が少なく、くせのない味である。
　以上のことから、「空知交16号」は果実外観品質が優れ、整枝作業等の栽培管理が行いやすいため、7月下旬までに収穫となる無加温半促成作型において、「ルピアレッド」との差別性を求めている産地への普及が見込まれる。

4. 普及対象地域及び普及見込み面積
　普及対象地域：全道のメロン栽培地域
　普及見込み面積：20ha

5. 保有種子量
　「空知交16号」　　約10,000粒
　種子親「DHM-R2」　約 2,000粒
　花粉親「Dkg」　　約 2,000粒

6. 栽培上の留意点
　1)収穫直前まで土壌水分が多い場合、あるいは過剰に果皮が硬化する管理（ハウス内の低温や乾燥）を行った場合は裂果が発生する恐れがあるため、栽培管理に注意する。
　2)果形はほぼ正球であるが、温度・灌水管理によってはやや扁平になる場合がある。そのため、開花から縦ネット形成期はやや高温・多灌水気味に管理し、果実縦肥大の促進に努めるとともに、横ネット形成期以降の高温・多灌水管理は避ける。
　3)ハウス抑制作型ではハウス内が高温になりやすく、扁平果や裂果の発生が懸念されるため、栽培には適さない。
　4)加温半促成及びトンネル早熟作型は未検討である。



空知交16号　　ルピアレッド

写真　無加温半促成作型における果実およびネットの比較